

観察者の「私」の物語りの構成 ：筆者自身のフィールドワーク過程の再検討

松 嶋 秀 明¹⁾

問題意識

はじめに

近年、心理学においても社会構成主義的認識論をもち、社会や文化が人間の心理に本質的意味をもつと主張する研究がますます注目されてきている。例えば、社会文化的アプローチ (Cole, 2002/1996; Engestrom, 1999/1987; Wertsch, 1995/1991, 1998), 状況論 (Lave & Wenger, 1993/1991; Suchman, 1999/1987), 社会構成主義的社会心理学 (Burr, 1997; Gergen & Gergen, 1988) といったものがそれにあたる。しばしば、これはエスノグラフィー、会話 (談話) 分析といった質的記述法によっておこなわれる (茂呂, 2001)。こうした認識論を共有する諸研究を以下では社会構成主義的研究と総称するが、本稿ではまずこうした研究が現実の問題に関わる際に、現場にもたらす有用性あるいは困難について指摘する。そして、筆者がこれまで発表してきた一連の論文を反省的にふりかえり、論文中には見えにくくなっていった筆者のあり方について検討する。そのことを通して、現実の問題に関わろうとする社会構成主義的研究がしばしば見落としてきた研究者の倫理的責任について考察する。

まず、社会構成主義的研究が共通にもつ特徴を述べれば、それは「心 (社会構造)」の性質について従来の心理学がとってきた、それらを自明の前提にしたり、観察者と独立に存在する実体として把握するのではなく、人々のやりとりを通じて構成されたものとして考える点にある。社会構成主義的研究のなかで有名なものとして Ray McDermott の学習障害児をめぐる研究 (McDermott & Varenne, 1997) がある。ここではアダムという少年が、学校での活動でいかに「学習障害児」として、周囲に (そして時には自分自身にも) 理解されるように

なるかを記述している。McDermott は、一般的に神経学的な原因が想定される障害とみなされる「学習障害 (以下, LD)」について、それが「いかに人々が制度的、あるいは文化的なリソースを用いることで、アダムを古典的な LD としてみることを可能にしているか (McDermott & Varenne, 1997. p56)」と問いなおして、それを提唱している。そうすることで、彼は、アダムの個人的能力の不足が、それを個人的能力の不足と結びつけて見ることを可能にするような、特定の相互行為をとおして、周囲の人物に、あるいは、自分自身にも発見されることを例示している。同様に日本では、刑部 (1998) が幼稚園における 1 年間の参与観察から、ある子どもに対する、保育者の「ちょっと気になる」という実感が、その子どもの能力や保育者のあり方によって生みだされているというよりも、保育園での仲間関係、あるいは保育者との関係をつうじて構成され、かつ解消されていることを示している。

こうした研究は、これまでの研究がそうであったように、直接的に現場に改善案を呈示するものではない。そうではなく上述されたように、ある実践を支える視点、理論の見直しを助けるという意味で、現場の実践を改善する足掛かりとなる可能性がある (佐藤, 1998; 上野・西阪, 2000)。

社会構成主義的研究の困難

しかしながら、このような相対化作業はしばしば現場の人の熱心な取り組みに冷や水を浴びせるだけの結果になりかねない。実際、先の刑部 (1998) については、この論文の主旨があくまでも、あらゆることが関係の総体のなかで、なかば必然的にそのように追い込まれ形作られることを示すことにあり、現場の保育者の責任を問うようなものではなかったにもかかわらず、読者からは、保育者の責任や、当該の子ども、あるいは仲間のパーソナリティといった個人能力の問題を問うものであると誤って理解されることも多かったという (佐伯, 2001)。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

もちろん、社会構成主義的研究によって描き出される現実には、超越的な視点を想定せず、限られた研究者自身の視点からなされたものである（當眞，2000）。したがって上述の誤解を読者の理解力不足に帰属することはもちろんできる。しかし、その一方で誰の責任も問わず、何の因果的説明もしないという刑部論文の主旨は、現場に内在する関係性を論理的に説明するという意味では適切だとしても、そこから得られた知見を現場にフィードバックしたり、現場に提言していったりするという実践的な次元では不適切なものになりやすいと考えることもできる。そもそも、ひとくちに現実を相対化するといっても、それはあくまでも研究者の視点からなされたものに過ぎないのであるが、実際の研究ではそれがどのような視点からなされたものなのか明示されることは少なく、そのために分析者が超越的な視点にたっているかのような印象を抱かせてしまう（山田，2000のラディカルレフレキシビティー概念についての議論参照）。ここで問われているのは、論理的に現場を認識し説明する研究者ではなく、そうした語りを通じて現場に実践的に関わろうとする研究者の姿勢ではないだろうか。

研究の説得力に関わる問題もある。社会構成主義的研究ではしばしば何故特定の実践の、特定の場面を抜き出して分析するのか明示されないことが多い。おそらくは、非常に複雑であるはずの実践を対象とした膨大な資料（その多くは、通常、エスノグラフィーによって取り入れられる）の中から、ある箇所がとりだされ焦点づけられる。そのことが社会構成主義的研究を、説得力という点で低めているとも考えられる。例えば、状況論がその範とするエスノメソドロジーでは、分析に先立って明確な枠組みをもってデータを見るということはせず、データを詳細に眺めるなかから浮かび上がってくる意味について記述するという方法をとることが多い。清矢（2001）は従来の調査の感覚からすれば、当然とされる「データをその収集以前に設定されている研究関心にそって詳細に検討し、研究関心にそった箇所を抜き出してくる」という作業をエスノメソドロジーがとらず、前もってそのような枠組みを持たずに「データを虚心にみる」ことが重要になると述べている。

しかしながら、「理解」が既有知識と新奇な知識が結びついて生じるものだと考えれば、エスノメソドロジーにおいて分析者が「虚心」にデータをみるとしても、そこには何らかの枠組みが生じているはずである。とすれば、エスノメソドロジーのいう枠組みをもたずに分析するという態度は、枠組みを本当に持たないというよりも、むしろそれを「意識化しない」あるいは「枠組みをもたない」という枠組みをもつことだといえる。

清矢（2001）も述べているように、なぜそのデータに分析者が興味を持ち、どのような道筋で分析がすすむのかはある程度コンパクトに提示することはできても、本質的に見えにくい。そもそも、分析者がどのような位置にたっているのかということさえ、実際には検討に先立って策定できるものではなく、データをみる過程で浮かび上がってくるものである。これまでの社会構成主義的研究の研究者は、こうしたデータを見る自らの存在を自明な前提とすることで対象世界の現実構成のありかたを断定的に語る事ができたといえるかもしれない。しかしながら、社会構成主義的研究においては研究者の提示する研究の結果は、客観的な真実というよりも、むしろ研究者の限られた視野からの見えにすぎないことはすでに述べた。対象世界に研究者の主観を介入させて「意味」をつかみとろうとする質的研究法がしばしば用いられるゆえんである。とするならば、現実の問題に対して何らかの発言をしていく際、研究者は自らの研究の有用性をその真実性に求めることはできない。それがいかに有用なものであるのかを現場の人々とともに交渉していくことが求められる。そこでは研究者はいやおうなく自らの姿をあらわしていく必要がある。

フィールドワーク過程の再記述という方法

以上のような困難の指摘からは、研究者自身のあり方を反省的に検討する必要性が示唆された。しかしながら、実際の研究のなかではこうした研究者自身のありかたを検討/考察することはこれまでそれほどなされているとはいえない。本稿では、実際にこれまでに筆者が上述の方法ののって行なってきたフィールドワークの過程を振り返る。そのために、これまでに発表された論文（松嶋，2000，2001，2002ab）をデータのの一つとして用いる。そして、そのことを通して筆者の3年間のフィールドワークのなかでの認識の変化と、社会的な位置取りの変化、あるいはアイデンティティの変化といったものを描き出し、それぞれの関係がどのようなものだったのか検討することを目的とする。

方 法

分析対象

松嶋（2000，2001，2002ab，審査中）の記述に加えて、筆者がそれを記述するために用いた記録をデータとして用いた。扱われるテーマは若干異なるものの、これらの論文に通底するのは「現場で行われていることを自明なものとして、それがいかに成り立っているのかと問い直す」という社会構成主義的な認識論であり、エスノメソドロジーで使用される会話分析的な手法であった。

分析方法

反省的分析にあたって、本山(2000)のフィールドワーカーが現場で〈出来事〉に出会うという事態についての検討は参考になる。ここでの〈出来事〉とは体験そのものではない。その体験が(書き言葉/話し言葉, 内言/外言などの区別にかかわらず)言語化されたものである。〈出来事〉はフィールドにいさえすれば誰でも一様に遭遇できるものではない。調査開始時点から何度も聞かされたありふれた語り、調査が進展したある時点から、にわかには重要な意味を持つようになるという体験、あるいは調査開始時には気にならなかった現地の方言が、実はフィールドワークを妨げる要因であったことに気づくという経験がそのよい例となる。〈出来事〉との遭遇という事態は、それがなければ気付かれることのなかった、フィールドワーカーが無意図的に持ち込んでいる前提を浮き彫りにするといってもよい。出来事を検討することが、フィールドワーカーが現場にどのようなスタンスで関わっていたのかをあらわすことになる所以である。以下では筆者の〈出来事〉との出会いという観点から、フィールドワーク過程をふりかえろう。そのことは過去の論文において筆者がどのような社会的位置取りをしてきたかを示すだろう。

結果と考察

フィールドエントリー：参入以前

更正保護施設A園というフィールド ある民営の更正保護施設(これ以降、A園)が参与観察の舞台である。筆者はこの施設でおこなわれているソーシャルスキルトレーニング(SST)を中心にして観察をおこなってきた。A園は昭和初期、現在この施設において中心的な役割をはたすN氏の祖父によって創立された民間の更正保護施設である。更正保護施設は全国にも数多くあるが、多くは成人専用か、成人と少年が共用する施設であり、少年専用の施設は国内でも少数である。60代後半の男性の園長、および園長婦人、その息子で30代後半の男性であるN氏、60代後半の男性であるK氏、栄養士の女性であるSさんの5名が主な運営スタッフである。N氏は企業で働いた後にA園で働きはじめて現在6年目である。現在ではA園の経営、少年の指導など、多方面に渡って中心的役割をはたしている。また、K氏は他の企業を退職後にA園に再就職し、現在2年の経験をもっている。A園は彼らが日夜泊まり勤務をはたすことで少年と恒常的に接するなかでの指導を行っている。この他、家庭裁判所の調査官、保護観察官などが随時A園を訪れる。

A園に入所しているのは、原則的に14歳以上、20歳未満の少年である。最大で6ヶ月、就労しつつ共同生活を

送る。現在は、最大で20人、少ない時で5-6人の少年がA園に居住している。在園中の少年はたいていいたって素直である。出会えば「こんにちは」と丁寧に挨拶をするものも少なからずいる。こういった少年にあって非常に礼儀正しいと驚く外部者も多い。

初めての訪問 私が初めてA園を訪れたのは、X年6月であった。この数年前から私はBBS会と呼ばれる、非行少年の更正保護を援助するボランティアのメンバーであった。BBS(Big Brothers and Sisters Movement)とは何かについて若干の説明が非行少年の更正保護を援助するための様々な活動をおこなうボランティア団体である。日本では、現在、約6千人が全国で約600ある地区会に分かれて所属し、都府県など50の連盟を組織している。連盟は8つの地方連盟を組織し、更に全体で日本BBS連盟を作っている。日本におけるBBS活動は、非行少年との個別活動(「友だち活動」と呼ばれる)が主となる。私がA園を知るきっかけも、この友だち活動の一環として行われたA園でのBBS主催の行事であった。A園にくる以前に非行少年が収容される施設に対して、筆者が抱いたイメージといえば、正直なところ「堅苦しい」、「融通がきかない」、「閉鎖的」といった否定的なものだった。少年のプライバシー秘匿を目的として調査活動には制約が加わる。今回の調査にも、この制約は大きなネックになると予想された。

しかし、筆者の先入観に反して、A園の指導者は明るく、柔軟な雰囲気であった。また、積極的にA園や少年を知ってもらおうという態度も見られた。私は「ここでなら調査を受け入れてくれるかもしれない」という希望をもって、早速に調査依頼の手紙を書いた。A園の先生方は私の依頼を快く受け入れてくださった。また、当時A園を監督していた保護観察官のTさんなら、私の研究を理解してくれるだろうと教えていただいた。私が所属するC地区会ではA園と長年つきあいがあった。BBS会員という身分は私がA園に参入するためには大きな役割をもったと思われる。

BBS会員であることがフィールドへの参入を容易にした反面、フィールドエントリーに際して筆者の罪悪感を喚起したのもまた、自分がBBS会員だという事実である。前述のようにBBSの目的は少年の更正援助である。調査が非行少年についての理解を促進することは確かであるが、業績を挙げ、就職を目指す大学院生が行う調査には、どうしても自らの利益のために行なわれるという印象がつきまとう。A園の少年にとって私は、「会いに来てくれる人」として意味付けられるだろう。私はその信頼を裏切る「偽善者」の気分であった。他のBBS会員から反発がではしないかという不安もあった。私

は当時のC地区会の会長に以下の様な内容の手紙を書いた。自分がBBS会員でありつつ、研究者として調査も行いたいこと。現在の自分には、そのことがBBS会員の役割とはやや異なって感じられること。会長は保護観察所に報告していただき、調査に支障はないとの返事をいただいた。こうして少なくとも私の調査に対して実質的な責任を問われることはなくなったのだが、私が少年に対してもつ後ろめたさは現在でも解消されたわけではない。

フィールドエントリー：参入から調査開始へ

A園への参入は許可されたが、調査開始に至るまでにはさらに時間を要した。観察場面に適したものとしてSSTをN氏から紹介された。筆者はそれにしがたってSSTを主な観察対象とした。ところがこのSSTへの参与観察をはじめてすぐ、SSTのセラピストとして参加していた、保護観察官であるTさんが私の調査にマツタをかけた。プライバシー保護のため、テープ録音は避けて欲しいこと、公表の際、できるだけ抽象化した形式で行なって欲しいという要望であった。A園サイドは私の調査について承諾したが、最終的にはTさんの決定に従わなければならない。当時の私の率直な感想は「それでは自分がやりたい研究はほとんど不可能だ」であった。当時の私は、少年のプライバシーは堅く守られるべきであると認識していたが、こうした閉鎖的な態度がかえって昨今の社会における非行少年への無理解をすすめているように思えてならなかった。したがって、この意見にも反発したかったが、とにかく調査を続けることが重要と考えて指示に従った。自分の調査にこだわるのが、少年達の援助にとって果たして必要なかと何度も考えた。内部の人間でなければ、こうした研究はできないのかと考えたものだった。しかし2ヶ月後、状況は変わった。Tさんが東京でSSTの書記を勤めた学生がいることを発見してくれた。「前例がある」ことが調査許可の理由であった。

一見すれば、Tさんの「前例がある」からという判断は、極めて官僚主義的な態度に見える。これを聞いた当初、私は調査が許可されたことを喜びつつも、違和感を覚えたものである。しかしながら、そこには、現場を知ってほしいという実践家の実感と、規則に従って慎重にことをすすめるなければならないという規範にはさまれて葛藤するTさんの両面的な態度がみてとれる。考えてみればTさんは、一介の大学院生である私の申し出に対して、規則をたてに言下に却下してもよかったはずである。しかし、彼女はそうしなかった。私のために解決策を探してくださったのである。Tさん自身が筆者の調査に対し

て、少なくとも拒否的態度をもっていただけではなさそうだとわかる。Tさん自身も、自らの監督責任を果たさざるを得ない以上、私の調査以来を独断で許可するわけにはいかなかったのかもしれない。違和感をもちつつも、私は調査が認められたことを喜んだ。N氏からは、少年を仮名にするという条件を守れば、筆者が自由にすすめてよいと言っていた。ただし、入所する少年とのあまり親密なつきあいは気をつけて欲しいと言われていた。

フィールドワーク過程/研究の生成

「よそのもの」としての観察者 実際にはSSTをはじめとしたA園のフィールドワークがはじまって、気になったことのひとつにテツオの振る舞いがある。このテツオの振る舞いについて筆者はいくつかの論文でとりあげている(松嶋, 2001; 松嶋2002aの脚注3; 松嶋2002b)。この少年は一見とても熱心に更正しようとしているようにみえた。例えば「決まりをまもること」についての集会でのテツオの振る舞いを、筆者は違和感をもって眺めている。集会の司会役であったテツオは、その場面だけみれば、過去の失敗経験をもとにした決意表明として聞くことができるような語りを披露した。しかし、当時の筆者はここにひっかかりを覚えている。例えば以下のような記述からはそれが読み取れる。

この集会では、「規則を守る」というテーマで話し合いがもたれた。そのなかでテツオは、自分の過去を完璧に悔い改めるべきであると主張していた。そして、周囲の少年が提案する、比較的ゆるやかな生活目標を、ことごとく否定していった。私は、完璧な悔い改めを求める彼の姿に、「そんなに上手くいくのか?」「すこし甘えたい気持ちはないのか?」と問わずにはいられない気持ちになった。彼の言動には、私が感じる「甘えたい」、「まあまあでよい」といった感情がまったく感じられていないかのように感じられた(松嶋, 2002a脚注3)。

筆者はこのように息苦しい雰囲気をもつテツオの語りに対してもつ。筆者は、しかし、このときに「そんなにうまくいくのか」という主旨の質問をテツオにしようとしてたためらっている。その理由は筆者の発言が現場の指導者に受け入れられるという確証がなかったことに起因している。さきほどのフィールドエントリーにおいてテープ録音の許可がでるまでの困難からも、筆者はA園に受け入れられることがまず頭にあった。立派な発言をするテツオを賞賛するならともかく、そんなに上手くいくのかと問うことは、この場にはそぐわない発言だと思っていた。そのこともあって、自分が勝手に発言することで現場に

混乱を引き起こすことを恐れた。また、自分が発言することで対象を変えてしまうことも避けたかった。現場への違和感をもちつつも、現場でのルールを感知して自分を隠すという、「よそのもの」として現場に参加している筆者の視点があらわになっている。

これはそれから4ヶ月後に行なわれた松嶋(2000, 審査中)のデータとなったインタビューにもいえる。このインタビューが行なわれたのは、筆者が初期の3ヶ月の観察を終えた直後である。ここでは筆者は語りの中で指導者がいかに子どもの問題をつくりあげるのか見てみたいという狙いがあった。

I: 親としても、別にその……、生活に困ってるとかそういうのではなく

T: う……ん、その部分もあるのかも。でも例えね、親が生活に困ってても(うん)、それを何とかするのが親のような気がするんですね

このようにインタビューの際には、親の責任を追求するN氏に対して「しかし、親も貧乏とかそういうことが」と両親を免責するような質問をしたほか、子どもには基本的な生活習慣ができていないというN氏に対して「基本的なこととは何ですか?」と問うている。これは以下のような意図として筆者はとらえている。

この質問の意図は、基本的という言葉でN氏が何を指しているのかを明らかにすることであった。この質問の意図は、基本的という言葉でN氏が何を指しているのかを明らかにすることであった。N氏のいう「基本的」という言葉が、社会のルールや道徳といった、どのような場所でも基本的であるとは必ずしもいえないことかも知れないと思ったからである。(松嶋, 審査中)。

これらは、筆者がN氏の話を受容し受け入れていたというよりも、異なる価値観をもち簡単にN氏の言を納得すまいとする姿がみえる。ただし、この時点での筆者はただN氏の語る問題を社会構成主義的認識論に基づいて相対化することしかできていなかった。N氏の語りの恣意性を指摘はできても、彼がまさにその語りをリアルなものと感じる理由に共感することはできなかった。

少年の可能性の発見 松嶋(2000, 審査中)で筆者はN氏にインタビューを試みたことはすでに述べた。SSTの効果について聴く筆者の質問に対して、タローという少年が集団にからまれるという事件にまきこまれた際、ケンカをすることなく、そこから無事に脱出してくることができたというエピソードを語り、もしかしたらタロー

がケンカをせずに逃げるのができたのは、SSTの効果かもしれないと語っている。松嶋(2002a)では以下のように書かれている。

彼(N氏)は先月のセッションに関して、抜粋3cにおいて不意の質問をおこなったタローのことを語っている。いわく、タローはこのセッションの二週間後、実際に特別に外出した際、集団にからまれるという事件に遭遇した。その際、ケンカをすることなく、そこから無事に脱出してくることができた。N氏によれば、タローはこのような状況下では自ら先頭に立ってケンカをしかけていく少年だったという。もしかしたら、タローが、ケンカをせずに逃げるのができたということは、SSTの効果なのかもしれないとN氏は語っている[X+1年2月の公式インタビューより](松嶋, 2002a, p. 29)。

上述の文章中の抜粋3cに示されるタローの事例は、実は筆者にとっても印象的であった。実際、筆者は以下のように書いている。

N氏はX+1年2月でのインタビューでは、「今までであれば、まさきに飛び出して行きそうな子」と表現していた。タローであることがわかったのは、筆者が、このインタビューから半年後に確認した時である。筆者は、抜粋3cの分析を行った結果、質問に先立ってN氏が語った少年は、タローだという予感をもっていた。このことは、抜粋3cでのタローの発言が、すくなくとも筆者には非常に印象的に聞こえたことを示していると思われる(松嶋, 2002a, p33)。

2つの記述で言及されているタローの事例(抜粋3c)とは以下のようなものである。すなわちタローはN氏がまとめて話を収束させようとしている声を遮って質問をする。それは「2人から誘われた時はどうするのだ」という主旨の質問であった。筆者はN氏へのインタビュー時点で、上述の抜粋3cとして、とりあげられたタローの分析の原形を着想していた。それは、タローの質問を、単に1人を2人にしただけのつまらない質問としてではなく、タローが自分の課題としてSSTをとらえたことの現れとして受け取ったという証として理解したらどうなるのか想像したものである。筆者は次のように書いている。

(N氏は)タローによってふられた質問を十分にはフォローしていなかった。もしN氏がタローの声を議論すべき問題としてとりあげようとしたのなら、以降の展開は幾分異なっていたかもしれない(松嶋, 2002a; p29)

ここからはタローの発話に興味を示し、それへのN氏の対応を残念に思う筆者の姿が読みとれる。実際、筆者

はこの話をきいた際、ここで語られている「普段ならまっさきにとびだしていきそうな」少年をタローだと直感していることはすでに述べたとおりである。

ところで、これは現場では共有されていない筆者の独自の直感である。N氏の気にとめられていなかったのももちろん、「驚いていました」という言葉から明らかのように、タロー自身にとっても意識化されていない。さらにいえば、これは外部観察者ならだれでもとれる視点でもないだろう。例えば教師経験がある人であれば、同じ場面をみてもN氏の苦労に共感してしまうということは起こりそうである。筆者の観察者としての立場は、外部観察者であるだけでなく、教育者としてのそれでもない。いわば現場で行なわれていることに対しての素人としてのそれに近かったのかも知れない。

ただし、筆者は当時、自分の立場から他者とどれほど隔たっているのかについての明確な反省はなかった。例えば、松嶋(2002a)では、先述のタローの事例(抜粋3c)に引き続いて、Tさんの語り(p29)が興味深い出来事として描かれている。このTさんの語りとは、その当時おこなわれたSSTにおいて少年がみせる有能性を、Tさんが「ショック」だったというように、予想外の出来事として語ったことをさしている。Tさんは経験のある実践家である。その意味で彼女のこの驚きは、新参者の私から十分な尊敬をとまなびながら聞かれてもよいものである。しかし、筆者はそれを少年の問題の深さの表明とは感じず、むしろ専門性のゆらぎととらえている。ここではTさんが長年つちかかってきた、実践とかかわる根拠とでもいえる論理を共有しようとはしていなかった。そしてむしろ、こうした揺らぎが新しいSSTの方向性を生むのではないかと期待してさえいる。実際にはSSTは変化しなかった。その際、Tさんの反応は筆者の期待とは正反対のそれであったので失望している。

しかしながら、期待とは裏腹に、次月のミーティングで、Tさんは「友だちの悪い誘いを断る」課題が、少年達にとってはあまりに生々しいために、相応しくないと申しだした[X+2月のFNより]。この発言の理由をたずねる私に対して、彼女は、SSTがあくまでも抽象的なスキルを学ぶ場であり、彼らの内面を吐露させ、カタルシスをもたらすものではないと語った[X+2月のFNより]。(松嶋, 2002a, p29)。

ただし、ここで注意が必要なのは、当時の筆者がこのように現場の論理とは異なる視角から分析を行なっているが、現場を評価する枠組みを身につけていなかったわけでもないことである。例えば、さきほど取り上げたテツオの例は、後にA園全体に共有されるものの、筆

者はそのような評価がなされる前から違和感を覚えている。テツオの問題性を、A園とは異なる視角から見て取っていたといえる。このような視点はむしろ筆者が日常的に使用している臨床心理学的な個人の理解に近いといえよう。先述のように、筆者は現場で行なわれていることに対して素人に近い視点ではあったが、しかし、臨床心理学的な目線で非行少年の行為を評価する視点をもつものでもあったといえる。

現場の異種混交性：筆者のアイデンティティの揺らぎ
Geertz, (1998)は「あちら側 (being there)」では現場をわかった顔をしつつ、「こちら側 (being here)」では学会に向けて好きなことを書くというフィールドワーカーのもつコウモリの態度について論じている。筆者の当初のフィールドへの参与の仕方は、まさにGeertzの描くワーカーそのものである。

フィールド参入時点における筆者にとって、フィールドワークに赴くことは大学からまったく懸け離れた現場へと、境界をこえていくというイメージでとらえられる活動であった。しかしながら、実際のところ、現場の人と観察者とはそれほど違わない。例えば、筆者がSSTについての知識をそれに依拠している論文の著者のワークショップに、N氏は参加している。しかもN氏はこのワークショップをきっかけとして筆者がより望ましいと思うSSTへとデザインを変更している(松嶋, 2001, 2002b)。筆者は「なんだ、それだったら最初から言っておけば良かったかな」と思った(松嶋, 2001)。その他にも、N氏は筆者も参照するような臨床心理学関係の本を家庭裁判所の調査官からすすめられたり、自ら購入したりしている。N氏のことを完全に自分とは異なる論理をもつ人物とみなすには、共通する点が多すぎる。そもそもN氏のサポートをしている家庭裁判所の調査官は、筆者と同様の専門性をもっているとも考えられる。

フィールドワークが進行するにつれて次第にこうした事情に気づくにつれ、もはや「あちら側」と「こちら側」との境界そのものがあいまいになってきた。このことは筆者がもつ「臨床心理学を学んでいる」というアイデンティティをあいまいなものにしがちである。上述の「最初から言っておけば良かったな」という実感は、その知識が筆者にとって現場ではみられない自分独自の知見であるという思いからであったと考えられる。せっかく見つけたにもかかわらず、現場がそのように変わってしまったら、筆者がその知識を見つけた価値が減じたように思われたのである。もちろん、研究者としてここに受け入れてもらっている限り、A園のために何かする必要はない。明確に期待されているわけでもないし、おせっかい

できえあるかも知れない。しかし、当初から私にはこの園のために何かをしたいという気がしてならなかった。**観察者の学び：共有された緊迫感** SSTのデザインが変わるといことがあってから、筆者はしだいに思いをN氏に伝えるようになっていった。これは以下の出来事からも明らかである。第1にX+1年9月にひらかれた第3回のキャンプのための打ち合わせは筆者をまじえて行なわれた。第2には、この時期に印象的な出来事としてX+1年7月に行なわれたSSTでの少年とN氏との議論がある。少年たちは雄弁にN氏の意見に反対し、N氏も容易に話をまとめられなかった(松嶋, 2002b)。そのこともあり、この時期、N氏からはSSTを続けることへの迷いが繰り返し語られた。その時、SSTの方法について筆者はN氏とともに話しあい、変化した方法をやめようと思うというN氏に、筆者の理解を告げて思いとどまるようにいった(松嶋, 2002b)。

(指導者同士でのミーティングの場面の会話がとりあげられた後)ここでは課題の選択が難しいことが述べられている。なかでも、最後のKさんの発言中の「我々の頭より、もっと鋭いものをもっておるんですよ」といった発言は、初期の事例におけるTさんの気づきに類似している。このように危機感を感じるNさんたちに対して、筆者は初期の事例を分析していた時から感じていた、「非行少年に何かを教えるというよりも、少年から教えてもらう態度をもつことが、逆に少年が主体的に自らの問題に取り組むことへの支援につながるのかも知れない(松嶋, 2001; p182)」という実感を述べた。これはN氏の「認知」重視のSSTの精神と異なるわけではない。しかし、翌月もN氏は発言権を与えることの難しさについて筆者に繰り返し語った(松嶋, 2002b; p13-14)。

さて、前述のN氏に対して少年が反論している場で、筆者はN氏が少年の不満にうまく対処してほしいと緊張しながら見守っていた。それまでであれば、少年がN氏に反抗する場面は、現場の虚構性を暴くという意味で筆者にとって面白いものであったが、この場面ではそれよりも、少年を納得させることができなければA園の生活が維持できないと思ったからである。これはN氏の目線に近い視点を筆者が有していたからこそ得られた認識といえるだろう。次の事例ではそのことがより顕著になる。

X+2年2月。私はいつものようにN氏の車で送ってもらいながら、今度で4回目を迎える親子キャンプについて話し合った。N氏はBBS会員のなかに、第3回のキャンプにおける、会員の位置づけに不満を持つ人がいると指摘した。会員に求められていた立場は、少年を善い方向に導くため、模範を示して欲しいというもので

あった。少年は我々のことを「先生」と呼んだ。これは第2回のキャンプの反省が元になっている。この時、新規会員が多く参加していた。彼らには事前に「少年は普通の子。普通の友だちのように接してください」と説明されていた。彼らに無用な心配を与えるのを防ぐためであった。

しかし、このことは結果的に裏目にでた。当時収容されていた少年たちは年齢も彼らと近く、また非行性も進んだ少年であった。そのためか特に女性の新規会員は彼らのペースにひきずられ、彼らがキャンプ中のルールを逸脱しても止められなかった。少しでも関係を深めようと頑張るあまり、少年との距離が近くなりすぎていると私には感じられた。キャンプ終了後に実に8割の少年が脱走したことで親子キャンプは完全に失敗となった。しばしば、それは女性会員の接し方のまずさと関連づけて語られた。当時、N氏は苦々しい顔で、女性会員の参加方法については再考の余地があると語った(松嶋, 審査中)。

これに対してBBS会員のもらす不満とは、おおよそ次の様なものであった。すなわちBBS会員としては、上下関係、あるいは教える-教えられる関係といったことの生じない、純粋な友だち活動をしたい。その点で、A園のキャンプで自分たちが期待されている立場は、少し異なるのではないかというものである。こうした会員の感じる違和感はBBS会員としては正当なものである。例えば、当時BBS会長であった佐藤勲平氏は、BBS会員がしばしば少年のことを「対象者」と呼ぶことに、会員側の優越性をよみとって違和感を表明している(日本BBS連盟, 2000)。BBS会員にとって、少年と上下関係のない関係をもつことは絶対に揺るがすことのできない条件である。

しかしながら、私は「友だち」であっても、彼らの要求をなんでも受け入れて良いわけではなく、一般的にいう友だちとは意味が違ふと考えてN氏の考えを肯定した。そして、やはり彼らに対しては、善悪の基準をしっかりと示して行かねばならないのではないかといったことを語った。その際、私は、自らがスクールカウンセラーとして勤務した際に遭遇した忘れられない次のエピソードを引用した。

学校中を見回っていた私は、偶然にもタバコを吸っている少年に出くわした。2人とも中学では評判のワルであった。私は正直いってまずいところに出くわしてしまったものだった。注意すれば怒鳴られるか、無視されるかに決まっている。見過ごせるものなら無視して通りたかった。しかし、それは許されない。私は勇気をふりしぼって「おい、タバコ

吸ったらあかんやないか。その1本だけやぞ。絶対タバコはいかん」といった。思いのほか、彼らは私との約束に素直にうなずき、そのタバコを吸い終わると立ち上がって教室へと帰っていった。どこか嬉しそうにも見えた。また別の日。生徒指導担当の教諭の前で、これみよがしにタバコを吸っている少年がいた。怒る代わりに彼女は「そうやって注意して欲しいんだろ」と笑った。少年は頷いた。甘えた表情にもみえた。筆者には、少年に取ってはきちんと怒ってくれることが喜びにもなることが実感された（X+2年冬のエピソード）。

これを受けてN氏は「何でも聞き入れてくれる/肯定してくれる友だちというのは、彼らはもうすでに持っている。むしろ、これはいけないと止めてくれる友だちがない」と語った。ただし、「今の子は頭ごなしに怒ってもダメ。ちゃんと説明してやる必要がある。でも、そうやって説明して、彼らが受け入れられるなら、それを恨みに思う子どもはいません」とのことだった。私は大いに納得できた。しかし、考えてみればこうした発想は、観察開始当初にはむしろ毛嫌いしていた「欠如言説」である。知らぬ間に私がそれを使っていることに気づいた時には愕然としたものだった。

総合的考察

フィールドワーク過程の反省的再検討により社会構成主義的研究が標榜する現実の相対化が、具体的な身体をもつ観察者によって、ある時間・空間的広がりの中かでなされたフィールドワークによって得られたことがまず確認された。さらに(1)その過程では研究者もまた現場に対する認識の変化があること、(2)その結果として研究者のアイデンティティは改編されることが改めて確認された。

フィールドワークを重ねるにつれて筆者の視点は増加し、定まった一つの視点にこだわらなくなった。これは筆者の視点自体が相対化されたことを意味する。心理療法場面では、クライアントの語りセラピストが同一化しやすいために、例えば子ども治療者が、クライアントとなる子どもの両親に対して怒りを感じることや、反対に親面接者が若い治療者である場合、子どもに同一化しやすく親の苦労に対する知識が乏しいために共感不全に陥って、しばしば親に対して批判的になりがちながことが知られている（例えば、橋本、2000）。

筆者のフィールドワークにおいても、当初は少年の目線にたって現場をみつめ、指導者の意見に批判的であったが、自身が少年と直接に対峙するという立場（スクールカウンセラー）に置かれることによって、実践者の苦労を共体験することができ、そのことによって得た経験から彼に共感することが可能になったと考えられる。逆

に言えば、これまで筆者にはこのような少年達に対するコミットメントの経験が絶対的に不足しており、N氏（あるいはTさん）が自身の働きかけを有意義なものとする個人史が見えていなかった。現場では異なる現実が同時並行的にたちあがっている。少年の視点をとおしてみられるA園と、N氏やTさんの視点を通してみられるA園とは当然異なっている。フィールドに参入した当初の筆者にはこの複数の視点の存在が認識されていなかったといえる。

さらに言えば、フィールドに内在する複数の視点は、少年よりの視点、指導者よりの視点というように截然と分けられるものではない。一人の人物のなかでも互いに相反する視点が混在している。例えば、N氏のなかには少年のなかに、「基本的な生活習慣がない」と自らとは異質な部分を見てとる視点もあれば、少年のなかに同年代だった頃の自分との同質性を見てとり、「たまたま運が悪くて」非行少年とされているだけだというように見る視点もある（松嶋、2000）。同様に少年の中にも指導者の目線をとる場合もあれば、そこから逸脱する場合もある。これら複数の視点が3年にわたるフィールドワークの結果として筆者には見て取れるようになった。これは観察者が対象世界に関与せず、ただ単に外部から見ていただけでは感じ取れなかったことである。現場に参入し研究者であると同時に、現地の人として主観を投入して意味を読みとったからにはほかならない。

James Gibsonの公共性概念（佐々木、2000）を援用して言うなら、筆者はそのときどきで局所的な見えしかできない人物であるが、それまでの探索の結果として得られた記憶を当該の現場に重ねてみることで「同時にあらゆる場所にいる」がごとき見えを獲得することができはじめたといえるだろう。ここで重要なのは、筆者はただ単にその場に参与していただけではなく、その場のなかで現地の人と語り合い、自らの理解を確かめていったからこそ、現場にある多様な意味に触れることができたことである。

さて、筆者のフィールド経験の増加にともなう視点の増加と相即的に、現場とのあいだには初期には厳然としてあった境界線はなくなり、自分のアイデンティティが定まらない状態へと進んでいった。米国におけるナラティブセラピーの推進者の1人である Harlern Anderson の以下の記述はこのような事態をよくあらわしているように思える。

セラピーを人間関係としてみれば、家族やクライアントを構成するメンバーは誰でその人たちとどう関わっているかということと、セラピストとして私たちは誰でその人たちにどう

関わっているかということと、同じ問題なのだ。セラピーは私たちの自己物語であって、クライアントが自分を定義し自分のアイデンティティを見つけるように、自分とはいったい誰でどのようなセラピストなのかという問いに答えてゆく物語なのだ。(Anderson, 2001:「会話・言語・そして可能性」邦訳 p34)

ここで述べられていることは、セラピストがセラピストたりうるのは対象となるクライアントに対して直接的に介入するその行為によってというよりも、対象となるクライアントを記述し、理解するという行為のなかで相互的に構成されるということである。セラピーのなかでクライアントが常に変化し続けるとするならば、治療の過程ではセラピストもまた変化し続けることを余儀無くされる。セラピストはその都度、自らのアイデンティティを確かめるために自己の再定義を繰り返すことを余儀なくされる。

そして、こうしたアイデンティティの改編は、フィールドワーカーが対象に対して倫理的に関わることを要請した。実際、複数の視点が混在している現在、筆者はもはや無責任に少年への教育的働きかけの虚構性を相対化してはいられない。現場の実践が絶対のものではなく、それは常に相対化され得るという事実をふまえつつも「ではどうしたらいいのだろうか」と考えざるをえなくなった。この観点からすれば筆者の研究者としてのアイデンティティすら、現場との対話のなかで構成されているといえる。確かに相互行為的に見るならば、現場で行われていること全てがよってたつ前提を疑ってかかることができる。しかし、現場に対して何らかの形で貢献したいと思い、なんらかの提言をすることや、役にたとうとすることは、こうした論理的な次元の分析で割り切れない問題である。そのために筆者は現在、自らの研究にある論理的次元と倫理的次元をうまく折り合わせることを求められている。

もちろん本稿で繰り返し述べているように、これまで検討してきたような研究の論理的次元への偏向と倫理的次元の忘却は、必ずしも社会構成主義的研究に内在する根本的な困難というわけではない(例えば山田, 2000)。問題は、それが正しく実践されていないことにある。現場を記述する際、積極的に研究者の存在を入れこんでいけるような記述の枠組みを整備することが今後必要になってくるだろう。そのために、エスノグラフィー内では対象の記述にとどまらず、積極的に自らの考えや感情を記していくことはひとつの手法として重要になってくるのではないだろうか。もちろん、これはやみくもに自分の体験を語れば良いというものではない。これまでの社会

構成主義研究が対象世界の人々のやりとりを通じて達成される「意味」を記述してきたのだとしたら、今後求められるのは、現場にいる人々の発話と同様に、研究者が自分の感情や考えを位置づけ、その布置のなかから現場でたちあらわれている「意味」について記述することである。こうすることで、読み手は書き手の視点の置き方、その移動から自身に置き換えて現象を吟味することが可能になると想われる。これはアクションリサーチ(例えば、杉万, 2000)などではすでに行なわれていることであるがまだまだ少数派にとどまっている。今後、こうした研究者自身もその記述となる社会構成主義的研究がなされることを期待する。

文 献

- Anderson, H. (2001). 会話・言語・そして可能性: コラボレイティブとは? セラピーとは? (野村直樹, 青木義子, 吉川悟, 訳) 東京: 金剛出版. (Anderson, H. (1997). *Conversation, Language, and Possibilities: A postmodern approach to therapy*. New York, N.Y.: Basic Books.)
- Burr, V. (1997). 社会構築主義への招待: 言説分析とは何か (田中一彦, 訳) 東京: 川島書店 (Burr, V. (1995). *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge.)
- Cole, M. (2002). 文化心理学: 発達・認知・活動への文化? 歴史的アプローチ. (天野清, 訳). 東京: 新曜社. (Cole, M. (1996). *Cultural Psychology: A Once and Future Discipline*. Harvard University Press.)
- Engeström, Y. (1999). 拡張による学習: 活動理論からのアプローチ (山住勝広・松下佳代・百合草植二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登, 訳) 東京: 新曜社. (Engeström, Y. (1987). *Learning by expanding: An Activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orienta-Konsultit.)
- Geertz, C. (1996). 文化の読み方/書き方. (森泉弘次 (訳). Geertz, C. (1988). *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. Stanford University Press: Stanford.) 東京: 岩波書店.
- Gergen, K. & Gergen, M. (1988). Narrative and the self as relationship. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 17-56.
- 刑部育子. (1998). 「ちょっと気になる子ども」の集団

- への参加過程に関する関係論的分析. 発達心理学研究, 9, 1-11.
- 橋本やよい. (2000). 母親の心理療法: 母と水子の物語. 東京: 日本評論社
- 石黒広昭. (1998). 心理学を実践から遠ざけるもの: 個体能力主義の興隆と破綻. 佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭 (編) 心理学と教育実践の間で. (pp103-156). 東京: 東京大学出版会.
- Lave, J., & Wenger, E. (1993). 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加. (佐伯胖, 訳) 東京: 産業図書. (Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York, N.Y: Cambridge University Press.)
- McDermott, R., & Varenne, H. (1997). Adam, Adam, Adam, and Adam: The cultural construction of Learning disabilities. In Varenne, H., & McDermott, R. (Ed.) *Successful Failure, The school America Builds*. (pp25-44). Oxford, N.J: Westview Press.
- 松嶋秀明. (2000). ある実践家による, 非行問題の物語的構成: 定性的研究の実際 (69) 日本心理学会第64回大会発表論文集 (p----).
- 松嶋秀明. (2001). 非行少年を対象としたソーシャルスキルトレーニングにおける相互行為: 少年自身の課題への意味づけの検討を中心にして 名古屋大学教育発達科学研究科紀要, 48, 175-184.
- 松嶋秀明. (2002a). いかに行少年は問題のある人物となるのか?: ある更正保護施設でのソーシャルスキルトレーニングにおける言語的相互行為の分析 質的心理学研究, 1, 17-35.
- 松嶋秀明. (2002b). 少年の声を聴くこと: 少年更正保護施設の事例から. 認知科学会. 教育環境のデザイン分科会研究論文集, 7-15.
- 松嶋秀明. (審査中). 非行少年の「問題」はいかに語られるか: ある更正保護施設職員の語りの事例検討
- 茂呂雄二. (2001). 実践とエスノグラフィの意味. 茂呂雄二 (編著). 実践のエスノグラフィー: シリーズ状況論的アプローチ 3. (pp1-21). 東京: 金子書房.
- 本山方子. (2000). フィールドワークにおいて〈出来事〉に遭遇すること: 民族誌『森の狩猟民』の記述を手がかりにして. 人間文化論叢, 2, 157-168.
- 佐伯胖 (2002). 幼児教育へのいざない: 円熟した保育者になるために. 東京: 東京大学出版会
- 佐々木正人. (2000). あらゆるところに同時にいる: ジェームズ・ギブソンの身体論. 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉 (編) 身体—よみがえる: 越境する知, 1 (pp225-247). 東京: 東京大学出版会.
- 佐藤学. (1998). 教師の実践的思考の中の心理学. 佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭 (編). 心理学と教育実践の間で. (pp.9-56). 東京: 東京大学出版会.
- 清矢良崇. (2001). 研究者がAV機器を用いるのはなぜか. 石黒宏昭 (編). AV機器をもってフィールドへ: 保育・教育・社会的実践の理解と研究のために. (pp29-46). 東京: 新曜社.
- Suchman, L. (1999). プランと状況的行為: 人間—機械コミュニケーションの可能性 (佐伯胖・上野直樹・水川喜文・鈴木栄幸, 訳) 東京: 産業図書. (Suchman, L. (1987). *Plans and situated action: The problem of human-machine communication*. Cambridge University.
- 杉万俊夫. (2000). 人間科学のフィールドワーク. 杉万俊夫 (編). よみがえるコミュニティ. (pp1-28) 京都: ミネルヴァ書房
- 當眞千賀子. (2000). 人がインスクリプションを用いて可視化する「人, もの, 世界の関係」の多様性: 川床論文に対するコメント. 心理学評論, 43, 24-26.
- 上野直樹・西阪仰. (2000). インタラクション: 人工知能と心. 東京: 大修館書店.
- Wertsch, J. (1995). 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳代子, 訳) 心の声: 媒介された行為への社会文化的アプローチ. 京都: 福村出版. (Wertsch, J. (1991). *Voices of the mind: A Sociocultural approach to mediated action*. Cambridge Mass: Harvard University Press)
- Wertsch, J. (1998). *Mind as Action*. Oxford, N. Y: Oxford University Press.
- 山田富秋. (2000). 日常性批判: シュッツ・カーフィンケル・フォーコー. 東京: せりか書房

(2002年9月30日 受稿)

ABSTRACT

The narrative construction of The observer:
Reconsideration of our fieldwork process.

Hideaki MATSUSHIMA

In the Psychological science, there has been a lot of interest for an epistemology named “Social constructionism (SC)”. In the present paper, at first, the strength and the weakness of researches based on SC epistemology are discussed. At the result, “Uncertainty of the researcher” is detected to be a main cause of the weakness of the researches based on SC epistemology. Therefore, I conducted to analyze a lot of my past papers retrospectively in order to know how I enter into the fields and how I detected some meanings in the fields. In this retrospective analysis, it is revealed that my perspectives for the field had been increased and my social identity had also been changed during my field works. At last, moral responsibility of the researcher, which is apt to have been overlooked in the researches based on SC epistemology, are discussed.

Social constructionism, Reseacher’s stance, Moral responsibility